脚本
勝ち得る者たち

http://unohirotest.mydns
.jp/hiroshi/cgi/top.pl

karasuno10

人　物

葵瞳（あおいひとみ）（25）チェロ奏者

草野幹久（くさのみきひさ）（30）その恋人、小説家

高校生

子供達

歩行者

①ショッピングモール・本屋

映画、〝ワンダの冒険〟のポスターの前を歩く葵瞳（25）と草野幹久（30）。瞳の身長は低く、首に赤いマフラーを巻いている。幹久はひょろ長い体格。幹久の両手には買い物袋。

店先の棚には書籍、『ワンダの冒険』が平積みにされている。瞳、嬉しそうな顔で、『ワンダの冒険』を手に取る。その表紙、著者、草野幹久。

幹久「欲しければあげるよ？　家にあるから」

瞳「（即座に）いらない」

カウンターで袋に入った『ワンダの冒険』を受け取る瞳。

瞳、『ワンダの冒険』の表紙カバーの裏、作者プロフィールの頁を開き、幹久の顔と見比べる。

メイクアップされた幹久の写真と、ボサボサ頭で目の下にくまのある幹久。

瞳「いつもこれくらい綺麗にしなよ」

幹久「僕は今とあまり変わらないと思うけど」
幹久、頬をかく。
瞳「その手……小説家にしておくには、もったいない指ね」
頬を掻く幹久の指先。
幹久「ひょろ長いだけだよ」
高校生が『ワンダの冒険』の本を持ってやってきて、幹久にサインを求める。
幹久、サインを書く。
高校生「彼女さんですか？」
幹久「はい」
幹久、頭をかいて、瞳を見る。
瞳、眉をひそめて、歩きだす。
幹久、サインを書き終え、瞳の横に並んで歩く。
瞳、ずんずん先を歩いていく。

②〝ハイツ〟・幹久の部屋・前（夜）
扉前には〝草野〟の表札。

③同・幹久の部屋・居間（夜）

大型テレビや高級家具やコタツの間に、平積みにされた書籍のタワーが点在している。コタツの上にはチェロのケース、オーストリア行き航空チケット、買い物袋。瞳、外着のまま、鞄に生活用品等を詰め込んでいる。幹久、ノートPCのある机に向かっている。幹久の服装、ドテラに伸びきったシャツ、ジャージズボン。

幹久、回転椅子を回し、瞳を見る。

幹久「ウィーンって？」

瞳、鞄を閉める。

瞳「音楽を学ぶには良い環境だし、チャンスも多い。幹久とは別れようと思っていたし」

幹久、眉をひそめチケットを手に取る。

瞳、チケットを幹久から取り返す。

瞳「一度、家に戻って、来週には向こうに行くわ。見送りはいらないから」

瞳、チェロケースにチケットをしまう。

瞳「もう決めたの」
幹久「僕の事、嫌いになった？」
瞳、幹久を見る。
瞳「……えぇ。大嫌い」
幹久、哀しそうに溜息をつく。
幹久「わかった……いってらっしゃい」
瞳「さようなら」
瞳、眉をひそめ、鞄とチェロのケースを持って、玄関に歩いていく。
玄関で勢いよくドアが閉まる音。部屋がゆれ、平積みにされた書籍が倒れる。

④地蔵公園・前（夜）
〝地蔵公園〟の石碑。入口に地蔵がたっている。

⑤同・中（夜）
子供達がサッカーをしている。瞳がブランコに座り、地面を見ている。瞳の傍らにはチェロのケース。

瞳「止めないんだ……」
瞳、子供達を見る。
楽しそうな子供達、公園から出て行く。
雪が降り始める。瞳、空を見上げる。
公園には瞳だけがいる。
瞳、ケースからチェロを取り出す。
瞳、小さな体で大きなチェロを構える。
瞳、チェロを弾く、ショパンの『別れの曲』。
ライトに照らし出される遊具。
公園の時計は十九時をさしている。

⑥〃ハイツ〃・幹久の部屋・居間（夜）
本の散乱した部屋で、幹久がノートPCに向かっている。瞳のチェロの音色。
モニタを凝視する幹久、台詞を話すように口を動かし、タイピング。
幹久、手の平を前に突き出して、指を見る。
幹久、腕まくりをして、タイピング。

⑦地蔵公園・中（夜）

時計は21時をさしている。

遊具にはうすく雪が積もっている。

瞳がチェロを弾いている。

チェロの弦が切れる。

瞳「痛っ！」

瞳、鼻をすすり、チェロのケースから、取り出した手袋を装着。瞳、体を抱えて震える。

瞳、チェロを片付け、出口に向う。

瞳、地蔵の前で立ち止まる。

雪の積もった地蔵。

⑧大橋空港・前

空港の看板〝大橋空港〟。

ロータリーがあり、ドア前にはゴミ箱がある。瞳、ロータリーを大きなスーツケースを引いて歩いている。瞳の表情、深刻。瞳の目、はれている。瞳は

赤いマフラーをしていない。
瞳、目に溜まった涙をぬぐい、両手で頬をたたく。
空港のドア前に立つ幹久、瞳を見る。
瞳と幹久、見詰め合う。瞳、Uターン。
瞳、逃げる。幹久、瞳を追いかける。
瞳、幹久を大きく、引き離していく。
空に、飛行機が飛んでいる。
瞳と幹久、ロータリーを一周して、空港前に戻ってくる。
よろよろと息を切らして走る瞳と幹久、背後から来た歩行者に追い抜かれる。
瞳、ゴミ箱の前で立ち止まり、スーツケースに体重を預け、休む。
幹久、ふらふらと瞳に近づく。
幹久「（息絶え絶えで）運動……不足だ」
瞳、スーツケースを振り回し、幹久つんのめる。
瞳、ゴミ箱の影に隠れる。
幹久「瞳……」

瞳「来ないで！　……何でいるの？」
幹久「僕は少しだけ、記憶力が良いんだ」
幹久、瞳に歩みより、瞳の手に触れる。
瞳、前を見据えたまま、
瞳「言ったはずよ。あんたなんか大嫌い」
幹久「うん。知ってる」
瞳「……興ざめ」
幹久「空気を読むのが苦手なんだ」
瞳、幹久からさらに顔を見えないように反対を向く。
瞳「……二度と日本に帰らないから」
幹久「会いに行くよ」
瞳「部屋が汚れる」
幹久「片付けられるようになるよ」
瞳「……期待してない」
瞳、手を握り返す。
幹久、瞳を見て、微笑む。
瞳の後頭部。
瞳、立ち上がり、幹久を見る。
瞳「髪の毛ボサボサね」

幹久「そうかな」
幹久、瞳の左手を大切そうに両手で包み込む。
幹久「小説を書くときに願いを込めるんだ。主人公がたくさんの人に愛されますように」
瞳、右手を握り締め、身を強張らせる。
幹久「瞳の良い所はいつも、前を見て歩いている事だ。小さな体なのに、大きな歩幅でずんずん歩く」
幹久、微笑む。
幹久「瞳はやれるよ」
瞳「やめてよ。きれい事は嫌いなの」
幹久「根拠はあるよ。僕は瞳のファンだから。向こうでも前を見て歩いているだろうなって。小説家には大切な素質だ」
瞳「買いかぶってる」
幹久「そうかな。僕はそう思う」
瞳、眉を曇らし、俯く。
瞳「（小声で）……ありがとう。きっと私はやっていける。この先、何があっても」

瞳、踵を返し、空港の入口に歩く。
幹久、瞳の背中を見守る。
雪が降る。
幹久、空を見上げる。
幹久「あぁ」
瞳、手の平を天にむける。
瞳の声「これから寒くなるな」
幹久の声「（同時に）これから寒くなるな」
瞳、天に掲げた拳を握り締める。

⑨（回想）地蔵公園（夜）
瞳、地蔵にマフラーをまく。
瞳「……私には、特別な人がいます。とても優しい世界を作る小説家です。私は彼といると駄目になると思いました。彼は弱さを知っているから強い。尊敬しているからこそ……今度、再び、彼に会う時は胸を張って言いたい。彼は私の恩人で、私は彼の恋人だ」
瞳の赤いマフラーの巻かれた地蔵。

著者HP：烏野の箱庭